

2 研究の実際 > (2) 「強み」に関する活動プログラム

ク 検証結果<小学校> B小学校 第6学年 対象者数39名(うち、回答者数38名)

【検証の視点 I】「あなたによかところ SAGA シート (自己肯定感チェックシート)」

児童がもつ「強み」に着目した交流活動が自己肯定感の高まりにつながったか。

【検証の視点 I - A : 「自分自身に関する自己肯定感」に関する項目】

【検証の視点 I - A - (a) : 「自尊感情」に関する項目】

【検証の視点 I - A - (b) : 「自己主張・自己決定」に関する項目】

キ 検証内容と検証方法 について

↑こちらをクリックすると、検証内容と検証方法を見ることができます。

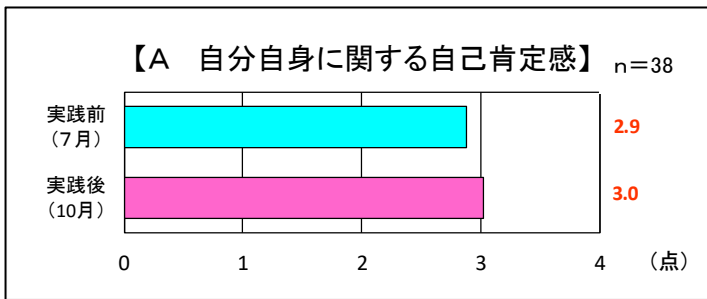


図1 児童の「自分自身に関する自己肯定感」に関する意識の変化 (全体)

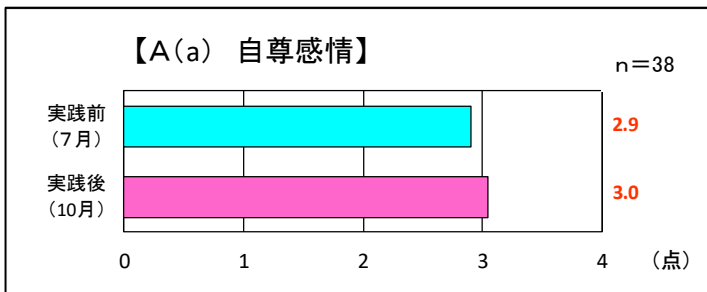


図2 児童の「自尊感情」に関する意識の変化 (下位尺度)

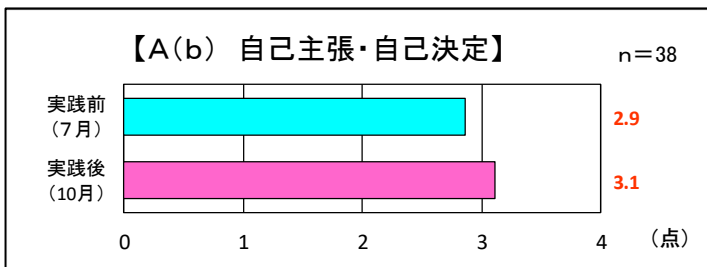


図3 児童の「自己主張・自己決定」に関する意識の変化 (下位尺度)

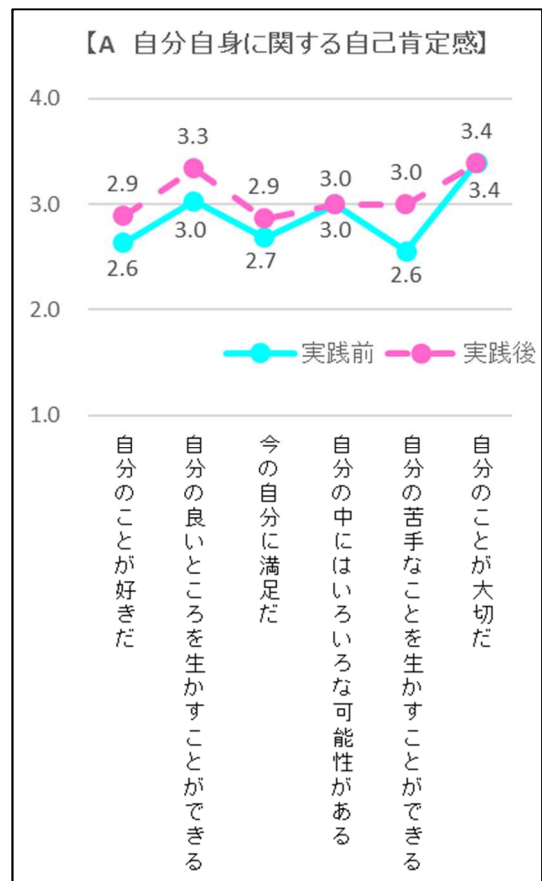


図4 児童の「自分自身に関する自己肯定感」に関する意識の変化 (項目別)

○授業実践の前後で、全体では数値が0.1ポイント上がりました（前頁図1）。また、下位尺度では「自尊感情」で0.1ポイント、「自己主張・自己決定」で0.2ポイント上がりました（前頁図2、図3）。項目別でも全体的に数値が上がっており、特に、「自分の苦手なことを生かすことができる」で0.4ポイント、「自分のことが好きだ」「自分の良いところを生かすことができる」で0.3ポイント上がりました（前頁図4）。また、児童の振り返りシートには、「自分には分からない『強み』があった。そして、それを生かして、最近少しずつ発表ができるようになった」「自分の『強み』をどんどん成長させたり、新たな『強み』を作ったり発見したりして、成長できるようにがんばりたい」「自分の『強み』は何かが分かって良かった。自分の『強み』を信じていこうと思った。自分の『強み』を生かしてみんなを笑顔にしたい」などの記述が見られました。これらのことから、児童がもつ「強み」に着目した交流活動を通して、児童が「強み」への理解を深めながら自分の「強み」を知ったことにより、「自分自身に関する自己肯定感」を高めることができたと考えます。

【検証の視点 I-B：「友達との関係を通した自己肯定感」に関する項目】

【検証の視点 I-B-(a)：「関係性」に関する項目】

【検証の視点 I-B-(b)：「自分は価値ある人間」に関する項目】

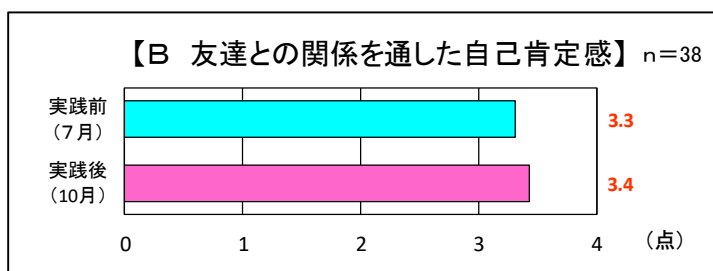


図5 児童の「友達との関係を通した自己肯定感」に関する意識の変化（全体）

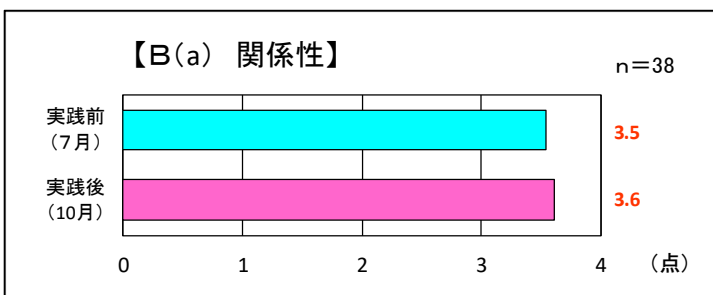


図6 児童の「関係性」に関する意識の変化（下位尺度）

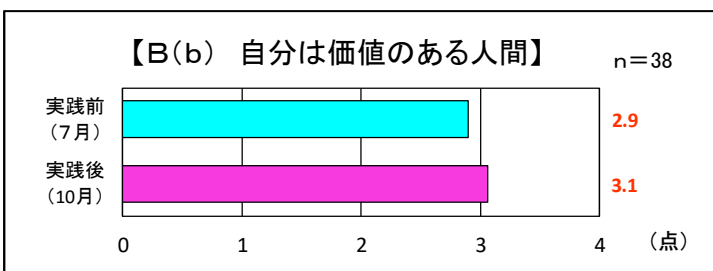


図7 児童の「自分は価値のある人間」に関する意識の変化（下位尺度）

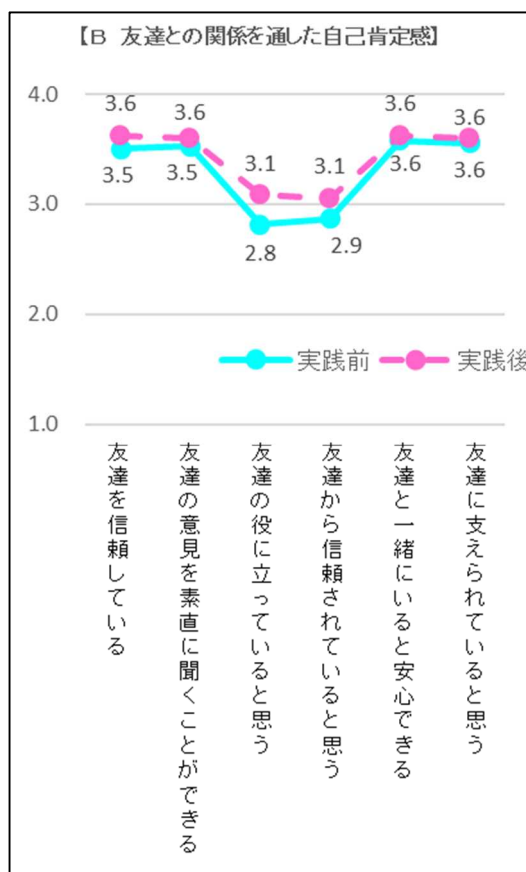


図8 児童の「友達との関係を通した自己肯定感」に関する意識の変化（項目別）

○授業実践の前後で、全体では数値が0.1ポイント上がりました（前頁図5）。下位尺度では、「関係性」で0.1ポイント、「自分は価値のある人間」で0.2ポイント上がりました（前頁図6、図7）。項目別でも全体的に数値が上がっており、「友達の役に立っていると思う」で0.3、「友達から信頼されていると思う」で0.2ポイント上がりました（前頁図8）。児童の振り返りシートには、「友達から自分が気付かなかった『強み』を見付けてもらって嬉しかった。自分が困ったときなどに『強み』を生かしていこうと思った」「私は友達に『強み』を教えてもらい、私にもこんなすごい『強み』があったんだなと思った。今後はその『強み』を生かしていきたい」などの、友達との活動を通して感じたことを肯定的に捉えた記述が多く見られました。これらのことから、児童がもつ「強み」に着目した交流活動を通して、児童が自分の「強み」を友達から伝えてもらうことは、他者からの評価を意識し始める高学年の児童にとって、「友達との関係を通じた自己肯定感」を高めるために有効であると考えられます。

◎以上のことから、児童がもつ「強み」に着目した交流活動が自己肯定感の高まりにつながったと考えられます。自他の「強み」を知ったり、互いに伝え合い認め合ったりするような交流活動は、「友達との関係を通じた自己肯定感」が「自分自身に関する自己肯定感」よりも元々高い児童の実態に即した有効な手立てであったと考えます。今後、「自分自身に関する自己肯定感」と「友達との関係を通じた自己肯定感」における下位尺度「自分は価値ある人間」が低く、自分への評価が厳しい児童が、自分自身を肯定的に自己評価することができる段階まで高めていくためには、児童が互いに自他の「強み」を伝え合う活動を継続的に繰り返し行うことが必要であると考えます。そして、自己肯定感を高めることによって、児童が自他のよさを認め合う学級集団づくりにつながっていくと考えます。

【検証の視点Ⅱ】「がばいシート」

児童がもつ「強み」に着目した交流活動が互いに自他のよさを認め合うことのできる人間関係を築くことにつながったか。

【検証の視点Ⅱ-A：学級の雰囲気】

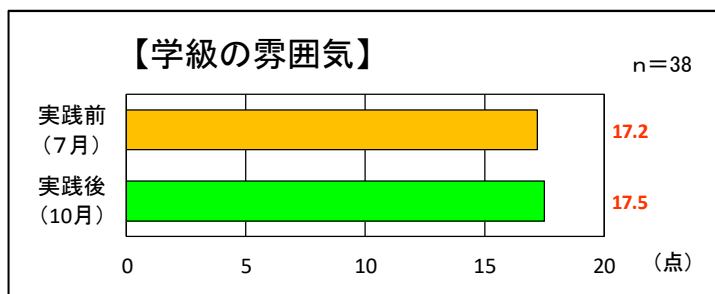


図9 児童の「学級の雰囲気」に関する意識と行動の変化（全体）

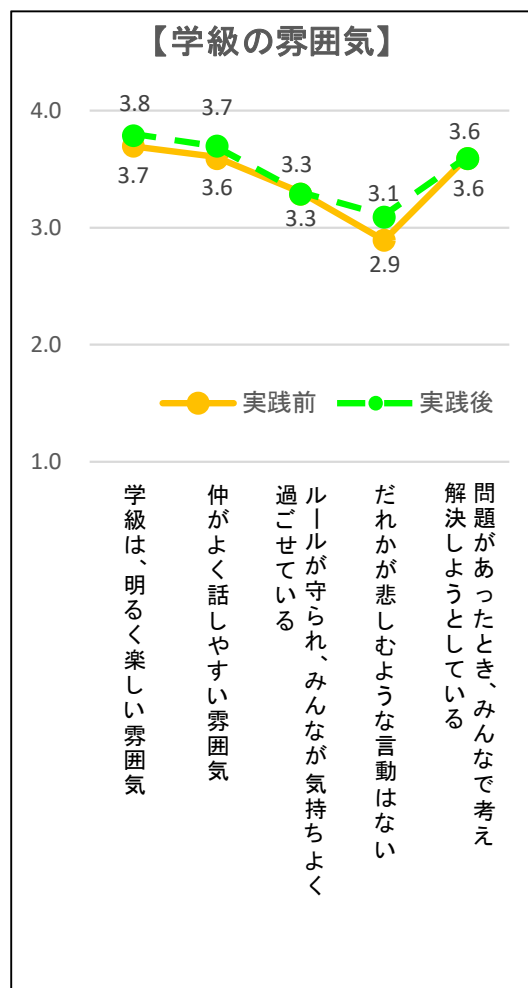


図10 児童の「学級の雰囲気」に関する意識と行動の変化（項目別）

○授業実践の前後で、全体では数値が0.3ポイント上がりました（図9）。項目別では数値に大きな変化は見られませんでした。しかし、「だれかが悲しむような言動はない」で0.2ポイント上がりました（図10）。また、児童の振り返りシートには、「授業でいろいろな人から『強み』を教えてもらった。すごく信らいてくれる仲間だと思った」「自分が意識している『強み』や意識していない『強み』を友達が丁寧に書いてくれたからうれしかった。感謝している」「話し合いのやり方が上手だと思う。人の意見をちゃんと聞いているから良いと思う」などの、友達との活動を通して互いに信頼し思いやりの気持ちが芽生えたことが感じられるような肯定的な感想が見られました。これらのことから、児童がもつ「強み」に着目した交流活動を通して、児童が互いに自他の「強み」を伝え合ったことにより、「学級の雰囲気」が良くなったと感じられるようになったと考えます。

【検証の視点Ⅱ-B：友達との関係】

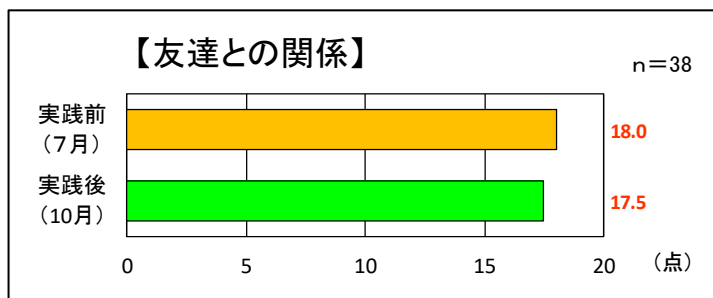


図 11 児童の「友達との関係」に関する意識と行動の変化 (全体)

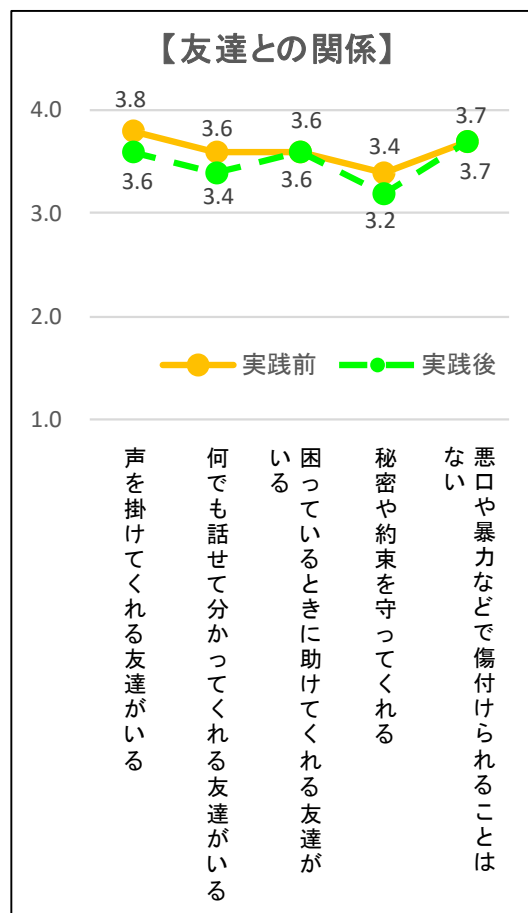


図 12 児童の「友達との関係」に関する意識と行動の変化 (項目別)

○授業実践の前後で、全体では数値が 0.5 ポイント下がりました (図 11)。項目別でも「声を掛けてくれる友達がいる」「何でも話せて分かってくれる友達がいる」「秘密や約束を守ってくれる」で 0.2 ポイント下がりました (図 12)。しかし、児童のワークシートには、「私は今まで何度かなやんだことがあって、解決するためにとっても時間がかかった。でも、今は、自分や友達の『強み』を知っているので、これからはなやんだときに『強み』を生かそうと思った。友達がなやんでいるときには、その友達の『強み』を教えてあげたい」「友達も自分も『強み』を知って、それを生かす方法を考えて、それを実行している。これからもがんばっていききたい」などの記述が見られました。また、担任への聞き取りから、「数値が下がった原因は、思春期を迎えた女子児童に多く見られる友達関係の悩みであると思われる。学級全体では、問題が生じたときに自分たちで解決しようとする姿や、友達を思いやる言動が増えている。また、発表が苦手な児童が少しずつ発言できるようになったり、友達とうまく関われない児童が、冗談を笑顔で受け止めることができるようになったりするなど、個人の成長も見られる」という実態が分かりました。これらのことから、数値は下がったものの、児童がもつ「強み」に着目した交流活動を通して互いに自他の「強み」を伝え合ったことにより、友達と日々関わりながら互いに成長し合い互いの力になりたいと感じていることから、今後、学級における「友達との関係」が良くなっていくことが期待できると考えます。

◎以上のことから、児童がもつ「強み」に着目した交流活動が互いに自他のよさを認め合うことので

きる人間関係を築くことには十分につながっていないと考えます。担任への聞き取りから、その要因は、数名の女子児童の「友達との関係」のトラブルであることが分かりました。しかし、「学級の雰囲気」は良くなっていると感じていることから、グループ編成に配慮して学級の明るく話しやすい雰囲気を生かしながら交流活動に取り組みさせることによって、安心して「強み」を見付けたり伝え合ったりすることができると考えられます。今後、「学級の雰囲気」と「友達との関係」を良くしていくためには、児童が互いに自他の「強み」を伝え合う活動を継続的に繰り返し行うことが必要であると考えます。そして、自己肯定感を高めることによって、児童が自他のよさを認め合う学級集団づくりにつなげていきたいと考えます。